

第4回かわさきコンパクト委員会 議事録

日 時：2014年3月20日（木） 12時～13時

場 所：川崎市役所第四庁舎第3会議室

出席者：〔委員〕庄司、瀧田、岩森、末吉

〔川崎市〕地球環境推進室

〔事務局〕一般社団法人CAT

1 開会

2 議題

(1) かわさきコンパクト下期事業について

事務局より、資料に基づき、下期事業について報告された。下記の通り意見が出されたが、意見交換については、議題（3）に持ち越した。

<意見>

- 11月7日実施の交流会については、その後参加者相互のつながりができたようで、今後の動きが気になる場所である。
- 12月5日の第2回かわさきコンパクトセミナーでは、今までとは違う参加者が多かったことがよかった。内容も充実していてアンケートから好評だったのが見て取れる。
- セミナーのパネリストになった事業者はぜひ参加登録を呼びかけて欲しい。

(2) 国連グローバルコンパクト・かわさきコンパクト庁内関係部署会合について

市より、庁内に向けた国連グローバルコンパクト、かわさきコンパクトの推進について説明された。具体的な取り組みとして8月に末吉委員による庁内向け職員講演会を実施したこと、3月18日に庁内関連部署会合を開催し意見交換を行ったことが報告された。

庁内関連部署会合に参加した部署は、総務局人事部人事課、総合企画局都市経営部企画調整課、総合企画局自治政策部、市民・子ども局市民生活部市民協働推進課、市民・子ども局人権・男女共同参画室、経済労働局産業政策部企画課、経済労働局労働雇用部の各部署より計7名の出席で、事務局を地球環境推進室が務めた。

会合では資料に基づき、国連グローバルコンパクト（GC）について、そのGCの主旨に賛同して自治体として初めて参加したこと、市内への展開する手段としてかわさきコンパクト（KC）事業推進を行っているなどの川崎市の取組経過、基本的な考え方、課題と方向性、来年度以降の取組案について説明し、今後は媒体やなんらかの機会をとらえ

た協力等に関して個別に連携を取りながら来年度以降取り組んでいくこと等について有意義な意見交換ができたことを報告した。

以下、質疑応答である。

- とても画期的な会合と思うが今後はどの程度の回数で開催していくのか、またどのような反応だったか教えていただきたい。
- (市) 年に2回から3回を考えている。新年度早々には一回開催したい。意見はGCそのものや基本的なことに対する質問が目立った。企業はどのようにGCを捉えているのか?などの質問があり、例えば本日講演のイオンは、小売業として初めてGCに取り組んだことをPRすることで、ブランド価値をあげることを進めているといった説明をした。現在は環境局が所管しているが、人権、労働なども関係あることを共通認識として持つことができ、特に経済労働局ではセミナーや広報誌、冊子などでかわさきコンパクトを取り上げることができるのでは、という前向きな意見をもらった。
- KCに協力、というのは逆思考ではないか。本来行政の仕事はKCの理念が下地になっていて目的ではない、そこはスイッチを入れ替えていただきたい。さらに自治体間の競争を意識して、自分たちの本業を進める上でGCに参加していることの誇りを持って意欲的に取り組んで欲しい
- (市) まさにその通りと考えている。今回、正式な会合を持ったのは初めてで、次のステップとして、環境の切り口だけでなく労働や人権の切り口でもって共催などの形で他部署との連携を進めていきたい。職員には、GC、KCは土台であって目的ではない、川崎の都市としての価値の向上に寄与するものだという認識を広めていきたい。
- なぜ委員会方式でやっているのか、と言うところに大きな意味があると思っている。つまり、行政主体ではなく、参加している自分たちで主体的に進めることであり、川崎を良くしていこう精神につながっている。現在不足している人権などの視点を加えながら広い運動体として広がって欲しい。行政ができないことを代わりにやることも含めて連携した取り組みを進めていく。CCかわさきも連携というテーマでネットワークさせようとしているが、同様に、既に連携している所を発掘して連携を進めていきたい。

(3) 来期に向けての意見交換について

- 未だに庁内や市民にとって遠い存在である。庁内の関連部署との連携も始まってきたので 各部署のパンフレット等をつくるときにシール化してKCの名前を入れていくのはどうか。

- 同じく知ってもらおうということが大事と思う。広報にももう少し力をいれていきたい。市民の皆さんに触れてもらう機会を作り、中身を十分伝えることで KC の目指している所を理解してもらえないのではないかと思う。現状では参加している団体も KC は何をしてくれるのか、と待っている状態が多いと感じる。主体的に取り組んでいってもらうためにはどうしたらよいか
- 人口 145 万の市民に「故郷」という意識、自分の街であるという一体感ほどだけあるのか。そこを上手く認識しないと 145 万の街ではうまく機能しない。川崎市の一体感は地域からのボトムアップでは難しく、多種多様な人たちの一体感は川崎市（役所）が一步前を出て積極的にトップダウンで絶えず言い含めていく、そういったアプローチが必要なかと思う。庁内職員が、川崎の街がどうあるべきかを背景に、GC・KC の市役所の中の位置づけを今までと違った視点でとらえる必要がある。つまり、行政トップが基盤を創る上で欠かせない、市民の統一感を生むためのツールとして位置付け、全国に先駆けた取り組みとして取り上げれば川崎市の株も上がるのではないかと思う。
- （市）毎年 1 万か 2 万は人口が増えている。出入りが激しく多種多様な価値観がある。川崎都民と言われ、巨大都市には含まれた市の命題については、これから 10 年が勝負と考えている。
- 武蔵小杉の成長が目覚ましい。これに乗じて川崎が一番住みやすい街、一人ひとりの人を大切にす街として、売り出していく。川崎は大都会でありつつ自然も同居している。人権も世界レベルで取り組んでいく、GC の視点でものごとを考えて欲しい。
- 住み続けたいという人が着実に増えている。「音楽のまち」というコンセプトを発信して川崎のイメージを変えた。働く街だけでなく文化を取り入れて大きく変わった。住みやすい、と魅力のある街になっている。「コンパクト大賞」をつくり、取り組んでいる企業や団体を応援することで、魅力的なまちづくりを進めるのはどうか。
- 「人にやさしい街川崎」といったキャッチコピーをここから発信できるといい。

最後に、大きな方向性について共有できたとして、意見交換は終了した。

(4) その他

事務局から、次年度のご協力についてのお願いがあった。